

も、現実感のある所までしか受け入れていなかったと言うべきであろう。

千年後、日本地域で発掘が行われ、多くの埋蔵物が出現し、それを分析した学者たちは、日本はアメリカにずっと占領されていたと解釈するかもしれない。あるいはアメリカと同じような文化や思想を持っていたと思ひこむかもしれない。しかし現実、アメリカ的に進む方向ではあるが、「和魂米才」であることを、我々は

よく知っているのである。日本人の「和魂」は根強いと言うべきであろう。

最後に、展示会には国宝級の典籍から未紹介の資料まで、まことに価値の高い文献が、豊富に展示され、一大学で、これほどの展示を行えるのは京都大学くらいだろうと、専門の方々から高評を得たことを付言しておく。

(きだ あきよし)

附属図書館について思うこと

京都大学大学院工学研究科材料工学専攻
修士課程1年 柴田 暁伸

先日、久しぶりに附属図書館に行きました。思えば学部にも所属していたころは試験期間になると決まって附属図書館で勉強しており、結構身近に感じていたような気がします。しかし大学院に進むと研究室に自分の机がもらえ、わざわざ附属図書館まで行くことがなくなっていました。

そこで感じたことは、自分は今まで純粋に本を借りて附属図書館に行ったことがないということです。附属図書館には勉強をしに行くだけでした。つまり図書館=自習室という考えなのです。附属図書館にいる利用者の中にどれだけ純粋に本を探しに来ている人がいるでしょう。ほとんどの利用者が図書館=自習室と考えていると思います。なぜそう思うのでしょうか。それは図書館が静かで勉強に適しているという

ことでしょう。それは図書館の長所でもあると思うのですが、少し寂しい気もします。

私はほかの国立大学の附属図書館には行ったことはないのですが、比較することはできませんが、京都大学の附属図書館は世界に誇れる図書館だと思います。ですがそんな図書館も私は単なる自習室のひとつとしか考えていませんでした。もし他に勉強をする環境の整った自習室ができれば、間違いなく私がそちらのほうに行くと思います。

先日私は附属図書館にある本を探しに行きました。その本は既に絶版となっておりどこの本屋にも存在していませんでしたが、附属図書館で見つけることができました。そのときの感動は今も鮮明に思い出すことができます。そこで私が感じたのは図書館の価値というものは利用者の数ではなく、やはり蔵書の質、量であるということです。自習のためのスペースよりは蔵書の充実のほうが大切なのではないのでしょうか。(しばた あきのぶ)